

雨がっぱと医療現場

コロナ禍のなかで、定期的に通っている眼科や歯科、内科を受診した。各院とも感染予防のため必死の取り組みをして、診療を継続している。「持病」を抱える身であり、医院のスタッフの皆さんに感謝している。スタッフに聞くと、診察や感染対策に欠かせないマスクなどの在庫が不足して、不安を抱えている医院も多い。私たちのような医院よりも深刻なのが、感染者の治療に従事する大規模病院のスタッフの皆さんだという。

写真は朝日新聞 4 月 16 日朝刊社会面。大阪府は 15 日、新型コロナウイルスの感染者を治療する医師や看護師らが身につける防護服が、今後約 1 カ月間で約 10 万枚不足するとの見通しを明らかにした。



顔を覆う「フェースシールド」も約 16 万枚不足。医療用物資の確保が重大な課題となっている。府によると、1 カ月に必要になる高機能の N95 マスク、防護服、フェースシールドはそれぞれ約 31 万 5 千枚。それに対して府の在庫は不十分で、国からの供給分と府による追加購入の見込みを合わせても、5 月 9 日までの確保の見通しが立っているのはマスクだけ。防護服とフェースシールドは圧倒的に不足する。

一方、大阪市役所には 15 日、松井一郎市長が前日に「防護服の代わりに雨がっぱが使える」と新品の寄付を呼びかけたことを受け、1 万枚以上の雨がっぱが寄せられた。

この記事を読んで、前日に歯科医で聞いた話を思い出して、複雑な気持ちになった。とりわけ大阪の医療体制の脆弱さ、大阪府市、医療機関の危機管理の欠陥を痛感した。それと大阪の住民パワーである。市役所に雨がっぱが大量に送られ、職員はその対応に追われている。東日本大震災などでも、こうした動きはあったというが、コロナ禍拡大を「わがこと」として考えている人が増えているのだろう。その一方で、雨がっぱなどで、コロナに感染した患者さんに対応していいのか疑問に感じた。もし、第一線で命をかけて働く医療従事者が感染して、院内感染・医療崩壊したら、どうするのか。医療関係者や専門家の意見をお聞きしたい。そんな暇など、ないかもしれないが。



写真は大阪市役所からの帰り、堂島川沿いを

歩いて「ガーデンプリッジ」から撮ったものだ。土佐堀川沿いはよく歩くが、こちらは初めてだ。運動不足を解消するため、コースを変えて遠回りして梅田に向かっている。

(2020 年 4 月 17 日)